

中国に於ける欠歯の風習について*

戸 出 一 郎**

1. 序 言

医療以外の目的で歯を抜去する行為即ち欠歯の風習は、かつてアフリカ、オーストラリア、南北アメリカ大陸、東南アジア、ポリネシア、台湾、日本等に存在していたが、中には現代までその風習が続いている民族もある。

中国では古典に欠歯の記述を見るものの、实例についての報告は台湾を除いては極めて僅かで、三宅宗悦、金関丈夫、宮内悦蔵、顔聞の4氏の報告があるのみである。しかしこれらの報告によって中国本土に於ける欠歯の存在が明かにされたことは大きな意義がある。

それゆえ、ここに4氏の報告の内容を紹介し、諸文献に基いて考察を加え、中国に於ける欠歯の風習の存在と意義について述べるつもりである。

2. 欠歯の事例

1929年4月、東方考古学会によって、南満洲関東州旅順管内南山裡尹家屯の漢代塋墓が発掘され、多数の副葬品と共に10数例の人骨が出土した。この人骨中第2号墓前室出土の第2号人骨の下顎に欠歯が発見され、三宅宗悦氏によって報告された¹⁾。報告によれば、この人骨の頭蓋には左側上顎犬歯と第1小臼歯、両側下顎中、側切歯、右側下顎第2小臼歯、左側下顎第2小臼歯が欠損していた。そのうち両側下顎第2小臼歯以外の欠損歯の歯槽は哆開し、明らかに死後歯を失ったと思われる。しかし両側下顎第2小臼歯の歯槽は完全に骨で埋まり、所謂骨性治癒の像を呈してい

た。両側下顎第1大臼歯はやや前方へ傾斜し、両側上顎第2小臼歯は挺出し、この歯の咀嚼面の咬耗はない。又、X線検査でも埋伏歯はなく、歯槽の様子や隣在歯の位置から見て先天的欠除歯とも思えない。又、頭蓋全体に老人性変化はないので老化による脱落でもないし、全体の歯牙の健康状態から齲蝕又は歯周疾患で抜去されたとは考えられない。従ってこの両側下顎第2小臼歯は医療以外の目的で抜去されたもので、この人骨は欠歯の例であると考えられる。

金関丈夫氏と宮内悦蔵氏²⁾は、1936年、満洲医科大学より台北帝国大学医学部解剖学教室に送られた奉天行路屍中、壮年男性頭蓋の左右上顎側切歯、左右下顎中切歯を相称的に抜去した1例を認めた。本例は若年或は青年期に健康歯を人工的に抜いたものであるが、本例のような欠歯の様式は他に例がなく、これによって民族の所属を推定することは出来ないが、支那民族に所属する可能性が大であると述べている。

1944年、金関丈夫氏³⁻⁶⁾は南京博物館所蔵の中国古代の頭蓋を調査された。頭蓋の一部は1928年から1932年までの間に河南省安陽県の小屯、四盤磨、侯家荘で発掘されたもので97顆に及んでいる。これらの頭蓋の中で最も晒骨の程度が強く、発掘者によって殷代の頭蓋と記録されている1例に於て、両側上顎側切歯が抜去され、抜去後相当の年月を経過していることが発見された。しかし他の頭蓋には欠歯の痕は認められなかったが、これらは比較的後代のものと思われた。

又、同院には1930年に山東省城子崖から発掘された戦国時代のものと思われる頭蓋9顆があり、そのうち3顆は上顎部が欠落し、他の6顆中5顆に於て右側上顎側切歯の抜去の痕が認められた。

* On the custom of extraction of teeth in China.

** ICHIRO TODE

頭蓋はいずれも成年乃至熟年の男性（1例は女性であるかも知れない）のものであって、若令の時期に健康歯を意図的に抜去したものである。この5例は欠歯の例であると考えられる。

1972年、中国科学院考古研究所の顔閻氏⁷⁾は大汶口出土の新石器時代人骨の研究報告を行った。大汶口は山東省の寧陽県と泰安県の間にある新石器時代の遺跡で、1959年にこの遺跡の墓葬128座から79個の人骨が発掘され、山東省の済南博物館に保存せられていたものを顔閻氏が調査したのである。

人骨のうち調査された頭蓋は男性17顆、女性17顆で、下顎骨は男性14顆、女性12顆である。頭蓋はすべて後頭変形型の変形頭蓋となっている。

欠歯の調査は男性11顆、女性20顆の頭蓋について行われた。その結果は男性11顆のうち、歯牙未抜去のもの4顆、已抜去のもの7顆、女性では20顆中未抜去のもの4顆、已抜去のもの16顆であった。抜去された歯はすべての例に於て両側上顎側切歯であった。年齢は最も若い男性では推定19～21歳で、女性では18～19歳である。別に12～13歳の頭蓋があったがこの例では抜歯されていない。このことは欠歯の時期が12～13歳以後18～21歳までの間であることを示している。

3. 考 察

中国本土に於ける欠歯の事例は前項にあげた4氏の報告に尽きるが、台湾については多くの報告がある。

台湾に於ける石器時代の欠歯の実例は、宮原敦氏⁸⁾と金関丈夫氏⁹⁾が報告している。宮原氏の報告によれば、高雄州恒春郡墾丁寮の石器時代の石棺墓から発掘された21体の人骨では、幼児を除いてすべて、14・5歳の頭骨でも両側上顎側切歯・犬歯が抜去されていた。しかし下顎の欠歯は1例もなかった。

金関氏によれば、虎尾郡西螺の墳墓から発掘された平埔族女性の頭蓋1例に両側上顎側切歯の欠歯があったということである。

台湾における古代の欠歯の風習は現代まで続いている。

康熙36年（1697年）に廈門から台湾に来て西部平原を視察した郁永河の著した「裨海紀遊」¹⁰⁾に、
……女告其父母，召挽手少年至，上麟門牙旁＝齒授女，女亦鑿＝齒付男，期某日就婦室婚……。

とある。即ち西部平原の平埔族は婚姻に先立って、男女とも側切歯2本を抜き互に交換したのである。又清朝時代18、19世紀に著された各地方庁編纂の地志、台湾方誌彙刊¹¹⁾の淡水庁誌に、

婦化工蕃……令雕題鑿齒之倫……。

と、彰化県誌に、

女有夫，断其旁＝齒，以別処子……。

と、鳳山県誌に、

而後為夫婦，抜去前齒，齒皆染黒。

と、諸羅県誌に

女有夫，断其旁＝齒，以別処子。今近県各社，亦多不折齒者。

とある。

各誌を綜合すれば、これらの部族では女は結婚すると両側側切歯を抜く風習があった。しかし諸羅県誌によれば、当時でさえ欠歯の風はすたれつつあったようである。

近代では欠歯の風習は西部平野に分布している平埔族の間ではすたれたが、山地に居住するタイヤル、サイセツ、ヴヌン、ツォウの4族には残っており、伊能嘉矩¹²⁾、佐山融吉¹³⁾、白井忠治¹⁴⁾、津崎孝道¹⁵⁾、野谷昌俊¹⁶⁾、松村 晋¹⁷⁾、宮内悦蔵¹⁸⁾、鈴木 尚¹⁹⁾、時津克次郎²⁰⁾、金関丈夫⁹⁾、大橋平治郎²¹⁾氏等によって報告されている。その報告を要約すれば、上述4族に於ては、男女とも8・9歳から15・6歳までの間に、両側上顎側切歯と犬歯、或は両側上顎側切歯を抜去する風習がある。欠歯様式は多少の例外はあるがこの2つの様式が最も多い。施術者は父兄、古老又は専門とする者で、欠歯方法は敲打か紐による牽引である。欠歯は成年式の行事として行われるという説もあるが、主として美容を目的とする。

台湾に於ける欠歯の風習は、日本が台湾を領有するようになって政令により禁止されたため次第に行われなくなった。

欠歯の風習はアフリカ、オーストラリア、東南アジア、ポリネシア、南北アメリカ大陸^{22,23)}、シ

ベリア、日本でもあった。

日本では1918年、小金井良精氏²⁴⁾により石器時代人に欠歯が確認されて以来多数の人々によって発掘報告された^{19, 25~29)}。

報告によると日本石器時代の欠歯は、上下顎切歯、犬歯、第1小臼歯にわたり、多彩な様式を示している。

中国の北方シベリア地方にもかつて欠歯の風習があったことはヘリチカ氏の報告により明かである^{30, 31)}。氏は1939年、レーニングラード、モスクワ、イルクーツクに集められているシベリア出土の新石器時代から近代に及ぶ頭蓋、男386顆、女366顆を調査した結果、男64顆、女48顆に欠歯を認めた。そのうち蒙古人の欠歯の率は比較的高く、欠歯を持つ頭骨は男28.3%、女11%で、下顎骨のみのものでは総計8.9%に認められた。殆どの例が上顎中切歯、側切歯の欠歯で下顎の中切歯、側切歯が僅かにあり、犬歯は3例に過ぎなかった。蒙古人の他には新石器時代人（イルクーツク地方出土）、Encolithic(Gornı Altai Oirotskai), Samoyeds, Voguls, Ostiaks (Little Ob River), Giliaks (Sachalin Island), Ulchi (Amur River), Yakuts, Chukchi, Buriats に欠歯が認められた。現代ではこの地方に欠歯の報告は無く、蒙古人に関する山本^{32, 33)}、松尾³⁴⁾代等の調査でも欠歯の存在は報告されていない。

上述のように中国周辺の各地に於ける欠歯の報告は多いが、中国大陆では前項の報告があるのみである。金関^{3~6)}、顔⁷⁾両氏の報告によれば中国古代人の欠歯は全例上顎側切歯である。三宅氏¹⁾の報告した遼東墳墓出土の1例が両側下顎第2小臼歯の欠歯であることは稀有なる1例であって、小金井氏^{25, 35)}は同様式の欠歯例がイギリスでも2例報告されているが他に例がなく一考を要すると述べている。

渡辺氏²⁹⁾は日本縄文時代の欠歯の研究に於て、台湾では上顎側切歯を、日本では上顎犬歯を中心にして欠歯が行われたことを論証しているが、中国大陆に於ける欠歯の様式は日本よりも台湾に近いと言える。

中国にはかつて欠歯の風習があったことを伝え

ている文書が若干ある。

晋の張華の撰と伝えられる博物志³⁶⁾卷二異俗に
荊州極西南界至蜀諸民曰獠子……既長皆拔去上
齒牙各一以為身飾

と述べている。

荊州は今の湖北、湖南、広西、貴州に当る地方で、その西南界の蜀は四川地方である。晋の時代にその地方の諸民を獠子と呼び、彼等は成人すると美容のために上歯を一本抜く習俗があったという。

宋の朱輔の溪蛮叢笑³⁷⁾には

筒環犵狁妻女年十五六敲去右邊上一齒
とある。

江上氏^{38, 39)}の見解によれば犵狁は獠に当る種族のようである。女が十五・六歳になると右上の一歯を敲打して抜去する風俗を述べている。

清の田雯の黔書⁴⁰⁾によれば

打牙犵狁剽悍尤甚女子將嫁必折其二齒恐妨害夫家也

とある。

打牙犵狁は犵狁の一部族であり、この部族には女子が嫁ぐ前に二歯を抜去する風習があることを述べている。夫に災をもたらすことを防ぐために二歯を抜くのである。

唐の杜佑の通典⁴¹⁾卷一八七边防三南蠻上に、

赤口濮在永昌南其俗折其齒剗其唇使赤又露身無衣服

とある。

永昌は今の雲南省保山県に当る。その南に歯を折り唇を赤く染める赤口濮と呼ばれる部族が住んでいたことが知られる。この赤口濮が如何なる部族であるかは分からない。

清の陸次雲の峒谿織志⁴²⁾には

打牙犵狁者父母死子婦各拔二齒投棺中
とある。

嫁入りに当って二歯を抜去する打牙犵狁の婦人は父母の死に際しても二歯を抜き棺中に入れるのである。

大明一統志⁴³⁾の貴州布政司、風俗の条に所轄夷人の名を列挙しているが、その中に打牙犵狁の名がある。

大清一統志⁴⁴⁾の卷三百三十貴陽府苗蛮の条犵狁の項に

其在平伐平遠者，為打牙犵狁，剽悍尤甚，父母死子婦各打其二齒，納諸棺中以為永訣。

とある。

又同書の卷三百四十大定府の苗蛮の条に

打牙犵狁左平遠州，最剽悍，女子將嫁，必折其二齒，恐妨害夫家

とある。

これによると清代には打牙犵狁は大定府（貴州省大方）に居住し，同族の女子は嫁入りの時と父母の死に際して二齒を抜去したのである。

服喪のしるしとして抜歯する風習はインドネシア，ポリネシアにも認められている^{22,23)}。嫁入りに際して夫に災をもたらさないために欠歯を行うのも，父母の死に対する服喪のしるしとして行うのも，共に精霊や死霊によるたたりを修祓することを目的として始まった習俗であろう，

打牙犵狁の抜歯の模様を描写した図が「苗繚図冊」⁴⁵⁾「番苗画冊」⁴⁶⁾「苗冊」⁴⁷⁾「苗俗風俗図」⁴⁸⁾にある。前書は傳斯年圖書館所蔵の11種類の苗蕃図集の中にあるもので，1973年に中央研究院歴史語言研究所で復印された画集である。序文の著者芮逸夫の考証によれば原著は恐らく乾隆，嘉慶の時代に写生されたものであろうという。後2書は東洋文庫所蔵の写本で，描写の年代は明かでないが，題簽等により恐らく前2書と同時代に写されたものと思われる。4書は苗族諸部族の生態を生々と描き，各，賛，附説，題詩を以て説明している。「苗繚図冊」と「苗冊」に於ける打牙犵狁の図では一人の若い女性の頭部を助手の一人が後から支えると同時に膝で左手を押え，もう一人の助手が右手をしっかりと握って動けないようにしている。術者は女性の前に膝をついて左手に棒を持ち，棒の先端を女性の前歯に当て，他端を槌で敲こうとしている（図1）。

番苗画冊では，既に抜歯を終った術者は棒と槌とを器に入れて立去るところで，その家の老母は之を門口に見送って謝礼を渡そうとしている。一方歯を抜かれた娘は痛そうに頬を押えているがその表情は何となくなまめかしい。傍に童が何やら



図1 打牙犵狁図（苗冊より）

入れた器を示している。恐らく抜去した歯牙が入っているであろう。

苗族風俗図では抜歯を終って帰る術者の後姿のみを画いている。術者の持つ器の中には槌と細い釘のようなものが入っている。

この4書によれば欠歯は専門の術者によって行われたと考えられる。抜去される歯は上顎前歯であろう。

苗繚図冊の賛には

打牙犵狁在黔西平越女將嫁先折去門牙二齒俗言恐傷夫家又名鑿齒苗……。

又，番苗画冊の附説には

女子將嫁必折去門牙二齒恐妨害夫家所謂鑿齒之民也……。

とある。

他の2書にも略同様の附説がある。

ここに言う鑿齒とは何であろうか。

山海經⁴⁹⁾の海外南經に

羿与鑿齒戰于壽華之野羿射殺之

とある。

郝懿行は註に，鑿齒は人也と言っている。

又，淮南子⁵⁰⁾の本經訓では

逮至堯之時十日並出焦禾稼殺草木而民无所食契綸鑿齒九嬰大風封豨修蛇皆為民害堯乃使羿誅鑿齒於疇華之野

とあり，高誘はその註に鑿齒は獸名であり疇華は南方の沢名であると記している。

郝懿行は人、高誘は獣としているが、いずれにしても古代南方に鑿齒なるものがいて諸民に害をなし、そのため羿に滅ぼされたという伝承を伝えている。

又、文選⁵¹⁾卷九所収の揚雄の長楊賦に
昔有彊秦封豕其土突竄其民鑿齒之徒相与摩牙而争之
とある。

江上氏^{38,39)}は、晉書卷八二習鑿齒伝により、かつて湖北省襄陽附近に鑿齒即ち欠歯の風習があったことを推察している。文選と晉書は鑿齒が必ずしも中国西南部に限られて存在したのではないことを示している。

桂海虞衡志⁵²⁾志蛮の条、獠の項に
其類有飛頭、鑿齒、鼻飲、白衫、花面、赤禪之属二十一種、今在江西南一帶甚多殆百余種也
とある。

本書では鑿齒は獠人の1部族とされている。博物志で獠人に上歯牙1本を抜いて身の飾りとする風習があることを述べているのを参照すると、苗繚図冊で打牙犵狁……又名鑿齒と、番苗画冊で打牙犵狁……所謂鑿齒之民也とあることから、打牙犵狁は鑿齒と同一部族の別名であると考えられるが、或は両者が混同されているのかも知れない。もともと鑿齒とは欠歯をも含んだ歯牙変工の行為を表す語であったと思われるが、初めはそれが1部族の名となり、長い間には似たような習俗を持つ他の部族にも用いられるようになって混同してしまったものであろう。

峒谿織志⁴²⁾には徭人の条に

又有飛頭鑿齒鼻飲花面白衫赤棍之類
とある。

これらの諸文献により、苗、徭、獠、筒環犵狁、打牙犵狁、赤口濮、鑿齒には、各々の部族に欠歯を含む歯牙変工の風習があったことが推察される。

新唐書⁵³⁾二二二南蛮伝に、渝州に於ける唐代の諸獠に関して述べ、

獠地多瘴中者不能飲藥故自鑿齒

病に際して薬を飲み易くするために歯をうがう風習があったと解されるが、江上氏はこれは当時

の俗解かも知れないと言われ、山崎氏の著²³⁾を引いて、アフリカのキクニ族にも同様の風習があることを指摘している。

三宅、金関、顔三氏の報告では欠歯は中国北東部の遼東、河南、山東で発見されている。之に対し前述の諸文献では、湖北、湖南、四川、貴州、広西、雲南地方にあった風習であることを伝えている。殊にいわゆる苗族について詳しく述べられている。

このように事実と文献とでは欠歯の習俗があった地域が異っている。金関、顔氏の発見は古代山東に欠歯の風習があったことを証明するものであるが、中国西南部に於ける苗族の欠歯については未だ報告がないから事実は分からないが、多くの文献に遺っているので無視することは出来ない。

江氏⁵⁴⁾の研究によれば、苗族は古代には三苗と名づけられ、楊子江上流の四川に居たが、周代から漢末までの間に北方から羌人に攻められて、長江に沿って東に移動し洞庭湖附近に至って土着した。これが春秋戦国時代の楚の宗族である。楚は長江に沿って東征し、沿岸の苗人部落を併合し、中原の呉越の宗族と合併同化するに至ったが秦代になって漢族に滅ぼされた。漢代には苗族は武陵蕃と呼ばれた。五胡十六国から南北朝時代にわたって苗族は戦乱に乗じて屢々中原に侵入し、長江中流の北岸一帯を占拠した。この頃は五溪蕃と呼ばれた。隋唐代になると漢族が再び勢力を得て南蛮を圧迫し、その上羌人の南遷も加わって西南に転進し、貴州山地に移動した。宋から元にかけてはじめて「苗」の呼名が表れる。唐宋元の時代に貴州、広西、広東へ更に東して江西、福建、浙江にまで広く移動した。明・清の時代になると苗族は漢族の強い圧迫を受けた。殊に清朝は徹底した武力弾圧と分割支配を行い、その上生苗皆殺し作戦を実行して数十万人の苗人を殺戮した。そのため苗族の人口は激減し、残ったものは西南へ逃げ、遠く雲南からインドシナ半島にまで至った。1949年の解放以後は各地に苗族自治州および自治県が設立された。苗族は古来独立自尊の心が強く、古代から今日まで部族を守り自立を保つために粘り強く戦い抜き、古来の風習を固く守って来

たが、その間漢族との接触は多く、言語、伝承、説話、風俗等に漢族の影響を見るのである。今日苗族の居住地域は、湖南、貴州、広西、広東、四川南部、雲南、海南島、福建、浙江、インドシナ半島にわたっている。

中国に於ける欠歯の意義は上述の資料だけでは明確にし難いが、打牙豕猪の子女が嫁入りに際し夫に災をもたらすことを恐れて2歯を抜去することと、父母の死に当って娘が2歯を抜いて棺中に投ずるのは、精霊や父祖の死霊のたたりを防ぐ意味があったと思われる。

小金井氏²⁵⁾は欠歯の風習の動機として、成人期、結婚期、喪、迷信、宗教的観念、武器、懲罰に関することであったとしても主なる目的はやはり装飾の意義であろうと言い、八幡氏⁵⁵⁾は苦痛を忍んで施術する本義は、社会的或は宗教的な深い根に萌し、後には次第に形式的に、又装飾的になったとすべきであると述べている。金関氏⁵⁶⁾は風習的欠歯は Pubertätskasteilung として行われるものと Trauerverstümmelung として行われる2つの場合があるが、共に死者の再帰への恐怖にもとづく、死霊による自己の Identification を避けるための1種の Camouflage としての変貌手段として起ったものであろうと述べている。

殷代の甲骨文⁵⁷⁾によると、病や死やその他もろもろの災は、祖先や虫獣などの霊がたたりをすることによって起ると思われていた。殊に父母の霊は霊力が強くて大きな災をもたらすものであった。万一災が起った場合は、霊を祭り、犠牲を供えて除祓の儀式を行ったのである。このアニミズムの思想はその後形を変えて中国民衆に伝えているが、欠歯の風習もこの思想と無縁ではない。甲骨文⁵⁸⁾に「貞干甲御帚燥鬲」（貞う、甲に帚燥の鬲を御せんか）とある。武丁の婦、帚燥が鬲を疾んだので父王虎甲の霊に御祭を行ってたたりを修祓しようかと神意を問うの意である。文中の「鬲」字は歯中に父祖の霊や呪力を持つ精霊が入り、惑疾を生ぜしめること、即ち蠱が入るさまを表している。古代山東に起り数度の遷都で安陽に至った殷人にはこのような信仰があったのである。

大明一統志⁴³⁾の貴州夷人の風俗の条に、「疾病不識医薬、被氈衫以為礼」とある。又、苗繚圖冊⁴⁵⁾に「病不服药用麵作虎首置箕内延鬼禱之」とある。

あたかも殷人が病に際し饗養を鑄刻した青銅器を供えて御祭を行ったのと共通している。饗養は虎面をモチーフとする紋様である。歯に蠱入るとの考えも又共通しているように思われる。

およそ文化の発展段階に於て、アニミズムやシャーマニズムに基づく風習が現れるのはあらゆる民族に共通した現象であり、且つ、欠歯の風習は全世界に広く存在し、これらがすべてもともと一ヶ所に起った風習の伝承であるとは思えない。中国は多種の民族から構成されていて、そのため文化の多様性を持っているから似たような風習も同一の来源を持つとは限らない。従って苗族における欠歯の風習が北方民族の影響によるものとは断言出来ないとも言えるが、苗族は古代から漢族その他北部民族と深い係りを持つことや、病や歯牙に関してアニミズムに基く共通の考え方や風習を持つことから、恐らく古代殷人が行った欠歯の儀礼或はその風習が、近代苗俗に別箇に伝承されていたのであると考えられる。又、欠歯の本来の意義は精霊や父祖の霊のたたりをのぞくための修祓の行為であったと思われる。

4. 結 語

中国に於ける欠歯の事例として、三宅、金関、宮内、顔氏の報告を挙げ、台湾、日本、その他各地で発見された欠歯の報告と対照し、中国文献に遺された欠歯の記録を参照して、中国に於ける欠歯の存在と意義について考察した。その結果は次の通りである。

中国では山東及び河南、遼東に於て古代の欠歯の事例が発見された。山東省城子崖で発見された5例に於ける欠歯の様式は右側上顎側切歯であり、山東省大汶口出上の23顆の頭骨に於ける欠歯の様式は両側上顎側切歯であった。又、尹家屯の1例は両側下顎第2小臼歯の欠歯で稀有なる様式である。更に現代の1例の奉天行路屍に於ける欠歯の様式は両側上顎側切歯と両側下顎中切歯で珍

らしいものであった。

中国に残る諸文献によれば、欠歯の風習は中国南西部の苗族に近代まで伝えられている。

欠歯は美容のため或は成人式の儀式として行われることもあったが、本来の意義は、結婚や父母の死に際して精霊や父祖の霊のたたりを防ぐことにあったのである。

稿を終るに臨み貴重な文献を御下与下さった元九大教授金関丈夫先生に心から御礼申し上げます。また、文献蒐集に御援助を賜った京都産業大学教授川口晃先生に対し厚く御礼申し上げます。また、長年に亘り東洋医学を御教授下さった恩師岡部素道先生に対し深甚の謝意を表します。また、文献蒐集に御協力をいただいた国立国会図書館の今川浩一氏および貴重な文献を貸与して下さい下された東豊書店の簡木桂氏に対し厚く御礼申し上げます。

文 献

- 1) 三宅宗悦：遼東墳墓人骨の抜歯例。人類学雑誌，46(6)：207，1931。
- 2) 金関丈夫，宮内悦蔵：満洲国奉天行路屍ニ於ケル抜歯例ニ就テ。台湾医学雑誌，37(7)：1184，1938。
- 3) 金関丈夫：古代支那の抜歯風習に就いて。台北帝国大学新聞，1944. 6. 6。
- 4) 金関丈夫：古代支那の抜歯風習に就いて。福岡医学雑誌，41(11)：874，1950。
- 5) 金関丈夫：中国古代人に於ける抜歯例骨。解剖学雑誌，26(2)：104，1951。
- 6) Kanaseki, T.: The custom of teeth extraction in ancient China. extrait des Actes du VI^e Congrès International des Sciences Anthropologiques et Ethnologiques, Paris, 1960。
- 7) 顔 閭：大汶口新石器時代人骨の研究報告，考古学報，37：91，北京，1972。
- 8) 宮原 敦：墾丁寮に於ける発掘。南方土俗，1(3)：109，台北，1931。
- 9) 金関丈夫：Dentes Vaginae 説話に就いて。台湾医学会雑誌，39(11)：1916，1940。
- 10) 郁永河：裨海紀遊。台湾省文獻委員会，台北，1950。
- 11) 台湾銀行経済研究室編：台湾方誌彙刊。台湾銀行，台北，1956-1958。
- 12) 伊能嘉矩：台湾土蕃の歯を欠く風。東京人類学会雑誌，22(258)：492，1907。
- 13) 佐山融吉編：蕃族調査報告書。臨時台湾旧慣調査会，1917。
- 14) 白井忠治：台湾生蕃タイヤル族の歯科医学的所見。日本歯科口腔科学会雑誌，3(3, 4)，1922。
- 15) 津崎孝道：台湾蕃人ノ歯牙ニ就テ。朝鮮医学会雑誌，55：285，1925。
- 16) 野谷昌俊：台湾蕃人ツォウ族歯科所見。日本ノ歯界，97，1928。台湾蕃人に於ける抜歯の風習に就いて。人類学雑誌，51(1)：35，1936。
- 17) 松村 晋：台湾蕃人ノ齶蝕罹患頻度並ニ齒彎及ビロ蓋ノ測定成績。台湾歯科月報，39(42)，1931。
- 18) 宮内悦蔵：所謂台湾蕃族の身体変工。人類学先史学講座18巻，雄山閣，東京，1940。
- 19) 鈴木 尚：人工的歯牙の変形。人類学先史学講座12巻，雄山閣，東京，1940。
- 20) 時津克次郎：台中州 Atayal 族(霧社)の口蓋，下顎骨並びに歯牙の人類学的研究。人類学研究，7，付録，1960。
- 21) 大橋平治郎：台湾高砂族及ビロ腔風習ノ一斑ニ就テ。歯科新報，19(2, 3, 4)，1926。
- 22) Schröder, H.: Die künstliche Deformation des Gebisses. Greifswald, 1906。
- 23) 山崎 清：人間の歯。創元社，東京，1948。
- 24) 小金井良精：日本石器時代人に上犬歯を抜き去る風習ありしことに就て。人類学雑誌，33(2)：31，1918。
- 25) 小金井良精：日本石器時代人の歯牙を変形する風習に就て。人類学雑誌，34(11, 12)：349，1919。
- 26) Koganei, Y.: Über die künstliche Deformation des Gebisses bei den Steinzeitmenschen Japans. Med. Fak. kaiser. Univ. zu Tokyo. 28(3)：429，1922。
- 27) 清野謙次：日本石器時代人研究。岡書院，東京，1928。
- 28) 樋口清之：日本先史時代人の身体装飾。人類学先史学講座，15，1940。
- 29) 渡辺 誠：縄文文化における抜歯風習の研究。古代学，12(4)：173，1966。
- 30) Hrdlička, Aleš: Ritual ablation of front teeth in Siberia and America. Washington, 1940。
- 31) 榎 一雄：ヘリチカ氏「シベリア及びアメリカに於ける前歯除抜の風習」。東洋学報，28(2)，東京，1941。
- 32) 山本 昇：蒙古人に於ける齶齒発生状況附蒙古人人工歯，歯牙欠損，瓜子児孔，軍医団雑誌(満洲)，20：11，1938。
- 33) 山本 昇，今村 剣：蒙古人の異常歯牙特に過剰歯並に短数歯。軍医団雑誌(満洲)，26：47，1939。
- 34) 松尾鉄之助：蒙古人頭蓋骨の欠損歯。朝鮮医学会雑誌(研究篇)，32(12)：1025，1942。(医学中央雑誌より引用)。
- 35) 小金井良精：日本民族中の南方要素の問題に就て。人類学雑誌，51(6)：232，1936。
- 36) 晉張華撰，周日用等注：博物志。朝鮮刊。
- 37) 明陶宗儀編：説郛。弓第六七 涎蜜 叢笑(宋朱輔)，清順治刊。
- 38) 江上波夫：南方支那民族の欠歯の風習に就いて。

- て。人類学雑誌, 55(1): 6, 1940.
- 39) 江上波夫: 中国の中部・南部における欠歯の風習. アジア文化史研究論考篇, 山川出版社, 東京, 1967.
 - 40) 清田 雯: 黔書. 清光緒一五.
 - 41) 唐杜佑纂: 通典〔御製重刻通典〕. 光緒二九年.
 - 42) 清陸次雲: 峒谿織志. 清刊本.
 - 43) 明李賢等奉勅編: 大明一統志. 明天順五 (宮刊大字本).
 - 44) 清乾隆中勅編: 大清一統志. 清光緒二七 (石印).
 - 45) 苗繹図冊, 中央研究院歴史語言研究所, 台北, 1973.
 - 46) 番苗画冊. 中央研究院歴史語言研究所, 台北, 1973.
 - 47) 苗冊. 清王鈞題画, 写本, 東洋文庫蔵.
 - 48) 苗俗風俗図. 写本, 東洋文庫蔵.
 - 49) 晉郭璞, 清郝懿行箋疏: 山海經. 清刊.
 - 50) 漢劉安撰, 明吳勉学校: 淮南子, 明刊.
 - 51) 梁蕭統編, 唐李善注: 文選. 清同治八 (胡氏覆宋本).
 - 52) 明陶宗儀編: 說郛. 弓六二桂海虞衡志. 清順治刊.
 - 53) 宋歐陽修等奉勅撰新唐書. 明万曆二三 (北監本).
 - 54) 江応 樑: 苗人来源及其遷徙区域. 辺政公論, 3(4, 5): 17, 27, 中国民族学会, 東方文化書局, 台北, 1943.
 - 55) 八幡一郎: 日本先史人の信仰の問題. 人類学先史学講座, 雄山閣, 東京, 1940.
 - 56) 金関丈夫: 抜歯風習の起源. 解剖学雑誌, 37(3)附IV: 4, 1962.
 - 57) 戸出一郎: 甲骨文に表れた殷人の疾病について. 日本歯科医史学会々誌, 3(2): 13, 1975.
 - 58) 戸出一郎: 甲骨文に表れた歯牙疾患について. 日本歯科医史学会々誌, 3(3): 18, 1976.